よみがえる文化財

美術品修復の現場から

□■14

阪神大震災のつめ跡

吉備国際大教授
大原　秀之氏

◆公務員に正式採用

数々の作品と出合いながら研修生を数年続けていましたが、その後、とうとう研修生を卒業して、東洋人としては初めて、「修復家」として正式に採用されることになりました。デュッセルドルフ市の公務員です。30歳にして初めてお給料を頂けるようになったわけです。それまでは美術館の仕事が終わった後や、土曜、日曜日に必死にアルバイトをして、わずかに出来た時間を見計らっていろいろな美術館を見て回っていたので、アルバイトをしなくてよくなったことを素直に喜んでいました。

しかし、正式に修復家になると、今度は私に研修生が付き、彼らを指導しながら傷ついた作品の修復をするようになりました。立場が一挙に逆転したのです。その後、近代・現代美術担当主任修復家となり、しばらくはドイツで仕事をしていました。そして、合計15年のドイツ滞在に終止符を打つべく、半年間ボーランド・トルーン大学（別名コペルニクス大学）修復学部で東欧の裏打ち方法を研究した後、1990年に帰国しました。

◆日本独特の条件

帰国当時の日本には修復家自体の数も非常に少なく、何だか無医村に飛び込んできた感じでしたが、私の故郷である神奈川県鎌倉市に修復アトリエを構えて、日本国内の美術館作品の治療をしてきました。確かにドイツで15年間、数多くの作品治療に携わってきましたが、ドイツと日本とでは気候も環境も全く違います。その顕著な例が梅雨時に発生するカビの問題、そしてもう一つはドイツではほとんど起こることがない「地震」です。

1995年1月17日の朝のことでした。私は一本の電話によって夢の中から現実の世界に一気に引きずり込まれてしまいました。

「先生、大変です。作品が、作品が壊れてます、すぐに来てください」

それは、香川県のある美術館からの緊急電話でした。私はその美術館の全作品の管理を開館当初から任されていました。異常に興奮して電話口で叫ぶ美術館学芸員の言葉に、はじめは何のことやらさっぱり理解出来ませんでした。

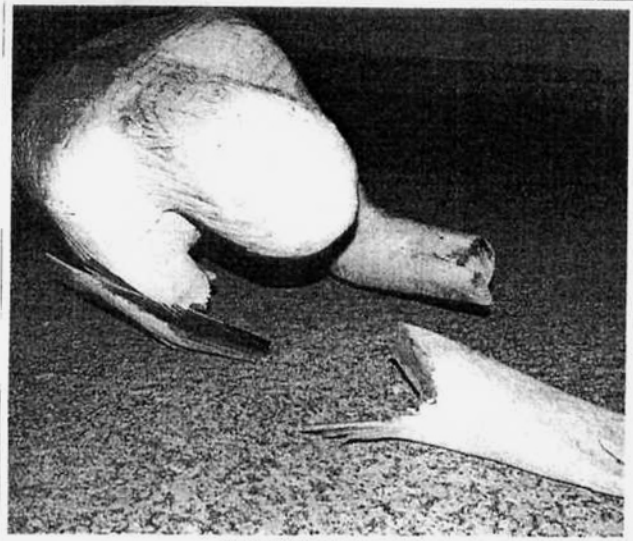
◆立像が〝複雑骨折〟

「そんなに悪い状態の作品があったかな」と考えつつ話を聞いていると、どうも地震で作品が壊れたと言っているらしい。電話の横にあるテレビをつけてやっとすべてがわかりました。その日の早朝に襲ったあの「阪神大震災」です。すぐに航空券を予約して午前中の飛行機に飛び乗りました。何と飛行機は神戸市上空を飛びました。眼下の神戸市内のあちこちから激しく煙が立ち上っているのが見えました。

予期出来ぬ事故に巻き込まれた作品は高さ2㍍の木造彫刻による男の立像でした。美術館の床にたたきつけられ、太い右腕が〝複雑骨折〟してしまったのでした。この大男はすぐに鎌倉のアトリエに入院しました。

この「大震災」によって多くの文化財が傷つき、あるいは消滅してしまいましたが、これを契機に文化財を正しく管理していこうとする動きが生まれたのです。

（毎週土曜日に掲載予定）



地震で転倒した木造彫刻

〝複雑骨折〟した部分の拡大写真

私の研修生、アネッテさんによる補彩作業